

## 国際シンポジウム四

## シンポジウム討議総括

黒澤 直道

平成二十八年一月二三日（土）午後一時三〇分より、國學院大學渋谷キャンパス常盤松ホールにて、国際シンポジウム「葬送の神話―東アジアの他界観と『古事記』」が開催された。本シンポジウムでは、はじめに鮑江氏（中国社会科学院社会学研究所研究員）による基調講演「俄亜ナシ族の宇宙観とトンバ教儀式『開路』」、および同氏の撮影になるドキュメンタリー映像『開路』の上映が行われた。鮑江氏は、中国西南部に居住するナシ族（納西族）の宗教・文化を対象として人類学的研究を行っている研究者であり、自身も雲南省麗江市出身のナシ族である。二〇〇一年から二〇〇二年にかけて、鮑江氏は四川省凉山イ族自治州木里チベット族自治州俄亜ナシ族郷において長期のフィールドワークを行い、その後もナシ族の宗教文化について研究を進めている。俄亜ナシ族郷は、ユネスコの世界文化遺産として有名な麗江旧市街から遠く離れ、現在でも交通が極めて不便な土地で、一般のナシ族にもその実態があまり知られていない。俄亜のナシ族には、麗江のナシ族にはもはや見られない、ナシ族の神話や独特の世界観を含むトンバ教の伝統が、現在でも保持されているとされる。映像人類学者でもある鮑江氏は、これら当地の貴重な映像を撮影してきた。

鮑江氏の講演と映像上映の後、立石謙次氏（東海大学文学部歴史学科、白族研究）、谷口雅博氏（本学文学部日本

文学科、上代文学研究)によるパネリスト報告が行われ、さらにこれらを踏まえて古事記をとりまく東アジアの他界観、自然観等をテーマとした討議が行われた。討議の司会は黒澤直道(本学文学部外国語文化学科、ナシ族研究)が行い、通訳は曹咏梅氏(本学文学部兼任講師、上代文学研究)が担当した。以下に討議の内容を概述する。

討議において最初にテーマとなったのは、鮑江氏の示したナシ族の垂直的な宇宙観である。この問題は、古事記における「黄泉の国はどこにあるのか」というテーマとも対比されよう。まず、司会者より鮑江氏に対して、これまでナシ族の学者などによって唱えられてきた「祖先の土地は北方にあり、死者の魂は北方の故地に帰る」という水平的な他界観との関係はどのようなものであるのか、という質問がなされた。

これに対し鮑江氏は次のように述べた。ナシ族の住んでいる中国の西南部には多数の民族が居住し、かつ古くからそれらが東西南北に移住を繰り返してきたため、周辺民族との相互の影響は極めて大きい。その中で、俄亜のナシ族にトンバ教の伝統が良く保持されてきたのはかなり特殊な状況である。トンバ教の経典に見られる神話や宇宙観と、現実の地理空間は別のものと考えられる。これまで一部の学者は、ナシ族の神話や経典に見られる移住の経路と現実の地理空間を結びつける考察を行ってきたが、個人的にはこうした方法にはあまり賛同できない。ここに示した垂直的な宇宙観は、俄亜ナシ族のトンバ教の儀式を通して抽出したものである。ただし、俄亜のナシ族が、ナシ族全てを代表するものではない。

この問題について、麗江市の南に位置する大理市を中心として居住するペー族(白族)を研究する立石謙次氏は、次のように述べた。ペー族の場合、世界観としては中国のものが使われるというのが基本的な形であり、つまりは漢民族に近いということになる。ペー族の祖先はインドから来たという説もあるが、それはペー族の先祖が漢字を持ち

始める過程で、漢民族の文化である漢字を用いながら、自分たちが漢民族とは違うということを主張するために出てきた言説と考えられる。従って、彼らの文化理解はかなり中国的であると言える。そもそも、「ペー族」という概念自体ができたのが一九四九年の建国以降においてであり、それ以前は「民家」（民間の人たちという意味）と呼ばれ、自らを漢民族だと思っていた。それが建国以降の民族識別において否定され、漢民族とは異なる「ペー族らしさ」というものが強く意識されるようになった。

このテーマについて谷口雅博氏は、次のように述べた。ナシ族の世界観と古事記の比較は今後の課題であり、総合的な考察を必要とする。垂直的・水平的な世界観という点では、日本は海に囲まれているので、海の彼方に異界があるという水平的な世界観が生まれやすいのではないかと思われる。それに加え、南洋諸島から伝わってきた南方系の神話には、水平的な考え方が多いようであり、逆に北方系、特に朝鮮半島の神話には降臨思想があり、垂直的な要素が強いと思われる。日本はこのような様々な要素が複合的に融合して、古事記の神話などができあがっているであろう。また、鮑江氏より神話・経典の宇宙観と現実空間の世界観は異なるという話があったが、古事記というのはまさに書かれた神話の世界であり、現実世界の宇宙観・世界観とイコールでないのは間違いない。現実空間の世界では海の彼方にあつたり、山の中にあつたりするものが、これを文字で書き表してゆくと、「黄泉」という文字を当てはめてゆくことで、世界観が変質してゆく。漢語の「黄泉」の意味が加わることにより、地下世界的なものになってゆき、単なる地下でもなく、単なる山でもない、複合的な世界観が出来上がっていったのではないか。その後、さらに仏教思想が入ってくることで地獄とも結びついて、日本的な観念が出来上がってゆく、というような感じを受ける。

次にテーマとなったのは、ナシ族における自然界の主宰者「シ (Sheeq)」である。鮑江氏の示したナシ族の宇宙観

において、「シ」は人間と同じ中間界に属し、文化／自然の対立において人間と対置しており、さらに人間の住む文化世界を包括する中間界の主宰者としての位置付けを与えられている。また、ナシ族のトンバ教における「シ」の儀礼はかなり発達している。司会者より鮑江氏に対して、このような「シ」の存在は、中国の諸民族の中では特殊なものなのか、という質問がなされた。

これに対し、鮑江氏は次のように述べた。確かにトンバ教における「シ」の概念は独特のものである。他の文化体系においてこれに相当する言葉が見いだせないため、これまでナシ語の「シ」（もしくは他のナシ語の方言における「シユ」）という名称がそのまま使われてきた。「シ」と中国の龍やインドのナーガとの関連を考える学者もいるが、こうした方法は、もともとそれが存在する文化体系から、それだけを取り出して行った表面的な比較に過ぎない。「シ」を理解するには、トンバ教の儀礼の体系の中で、その意味を考察しなければならぬ。その意味で言えば、「シ」はやはり独特の存在である。例えば、ナシ族の隣人と言えるチベット族、特に四川・雲南（チベット人の観念におけるカム地域Ⅱ東チベット）のチベット族においては、仏教信仰の他に、神山への信仰も根強い。しかしナシ族のトンバ教では「シ」は総合的な概念であり、山の主宰者であると同時に水の主宰者でもあり、こうした点は異なっている。

これに関連して、司会者より立石氏に対して、ペー族の「本主信仰」では、本来人間であった英雄などが祭られており、あまり異界とは関連がないように見える点、ナシ族とはかなり対照的ではないか、という質問がなされた。これに対し、立石氏は次のように述べた。

ペー族の「本主信仰」においては、確かに時に山を信仰したり、湖を神様とすることもある。しかし、ペー族はそれほど独自に世界全体の構成原理を考えたり、あるいは言語化しているということとはあまりないと思われる。もしそ

れをしようとするならば、やはりそこに持ち込まれるのは中国の道教的な世界観や、儒教の理気二元論などであり、それによってこの世界はどうなっているのかということを考えるであろう。彼らの信仰の中で最も重要な役割を持っているのは歴史的なものであって、例えば、大理の人々はなぜここに住んでいるのかということを考える時には、唐の時代、五台山から降りてきて、西から来た観音様がそこにいた鬼をやっつけて、自分たちのために土地を作ってくれた、と考える。そこでは唐の時代という風に、時代をはっきりと区切っていて、かなり歴史的な考え方をとる。いつ、どこで、誰が何をしたか、というのをはっきりと伝説として書く。現地でも道を歩いていると、ここでは観音様が下りてきた、ここではこの神様がこういうことをした、というのが必ず村の中に実感として入っている。そういう意味でも、個別的な神様はいるものの、この世界全体の構成原理や、究極的な存在としての神というものは、それほどペー族の中で言語化されているものではない、と考えている。

ナシ族の「シ」の信仰に関連して、谷口氏は以下のように述べた。「シ」は、日本神話的に言えば、地上の神のよくな感じがする。日本神話での地上の神と人との関係は、まさにナシ族における「シ」と人の間に見られるような、依存・共存、緊張関係に近い感じがする。日本神話の中では、確かに自然にはことごとく神が宿るといふふうにはなっているが、神として表すときには、それらに名前を付けて、例えば蛇にヤトノカミという名前を付けたりして、新田開発の時に妨害に訪れるヤトノカミを退治し、人と神の境界線を定めて、そこに杖を立てる、などというようなことをする。このような神と人との関係と、「シ」と人の関係は近いような気もする。しかし一方で、「シ」のような体系的なもの、やはりないということになる。

159 以上の二つのテーマを巡る討議の後、会場からは、日本の神話や信仰の世界では、人間世界と神あるいは死者の世

界は往来が可能であり、隔絶した世界としては表現されていないが、ナシ族の場合はどうなのか、また、火葬以外に土葬などはあったのか、火葬した後の遺骨はどうするのか、などの質問があった。

鮑江氏はこれに対し、ナシ族の異界についても頻繁な往来の観念があること、また、現在、俄亜のナシ族では、火葬の後の遺灰は持ち帰って人の目に付かない場所に隠しておくが、かつて葬礼は二度あり、二度目の葬礼の時には、遺灰を高い山の中の洞窟などにしまっていた、と述べた。さらに、麗江のナシ族はかつて漢民族の影響により、火葬が土葬に変えられた時期があった、とも述べた。

以上の内容を以て、シンポジウムの討議を終了した。古事記を含む神話の国際的な比較には様々なアプローチがあり得るが、神話の構成要素やモチーフなどについて広い地域を対象として比較を行うだけでなく、神話をそれぞれの地域の信仰体系の中で捉えた上で、その世界観・宇宙観を他の地域と比較することも極めて重要である。その意味で、自身もナシ族であり、かつトンバ教の信仰が極めてよく保存されている俄亜ナシ族郷において長期のフィールドワークを行ってきた鮑江氏によって示されたナシ族の宇宙観を、古事記の世界観と比較することには大きな意義があると考えられる。またこの時、ナシ族の極めて近くに居住しながら、漢民族の影響を深く受けたペー族の事例は、もう一つの参照点として重要な意味を持つと言えよう。